

第12回

# どこよりも、いのちを愛する 東北へ。震災からの復興に、 みなさんの力を貸してください。

東日本大震災によって大きなダメージを受けた東北の地域医療。  
以前から問題となっていた医師不足の現状はさらに厳しいものとなった。  
今回登場していただくのは、全国の医療関係者にむけて  
東北の地域医療への応援を呼びかけている

東北医療福祉事業協同組合・田中信幸理事長。  
東北の復興にかける、その思いを語っていただいた。

Photo: Mami Yamada Design: Takayoshi Ogura

聞き手・女優  
紺野美沙子さん

東北医療福祉事業協同組合理事長・SGグループ代表  
田中信幸氏



**紺野** 今回の企画では、自治体や大病院トップの方から、診療所のお医者さままで、いろいろな方に東北の地域医療が直面している課題を語っていただきました。まだまだ難問が残っているんですね。

**田中** 被災地の地域医療は壊滅的な状態になりましたからね。震災直後、十年ほど前までグループの病院で働いていた先生から「聴診器を流されたから届けてほしい」という連絡があったんです。そこで、急いで届けにいったら、診療所には何もない状態でした。

**紺野** グループの施設も被災されたんですね。

**田中** 宮古市田老のグループホームは建物が流失しました。石巻の施設では、入居されていたお年寄りが亡くなりました。施設の職員は懸命に救助活動をしました。自分たちは水に浸か

るように、一晩中両手で抱きあげていたというんです。

**紺野** 大変な状況だったんですね。

**田中** デイサービスの施設にはその地域の人たちが避難してきて、毛布などの物資が足りない。その手当てをしながら、一方でグループの施設に食べ物や紙おむつを供給しなければいけない。自宅が壊れたり、浸水した職員も施設に残ってケアを続けてくれましたので、下着や衣服、衛生用品等を届けました。協同組合という形でグループ全体を一本化していたので、なんとかその苦しい時期をしのげたんです。

**紺野** いまグループ全体でどのくらいの数の施設を運営されているんですか？

**田中** いま青森、岩手、宮城、福島で約百六十の施設を運営しています。職員の数も三千人を超えました。今から三十年前にリハビリ専門の病院を立ち上げ

たのがスタートなんです。もともと温泉ホテルだった施設を譲り受けて、温泉を利用した治療をしたり、理学療法士や作業療法士が活躍できる場にしようと考えたんです。

**紺野** 最初から、高齢者の方が対象だったんですか？

**田中** 当時多かったのは、交通事故や脳卒中による高次脳機能障害でした。若い人も多く、そういう人は一日も早く社会に復帰したいという思いが強い。ご夫婦の場合、奥様がリハビリに取り組みご主人を一生懸命励ますんですよ。その様子を見ていて、グループの経営理念として掲げている「今ひとたび、また」という言葉が浮かんだんです。

**紺野** お年寄りがまた元気になってほしいということかと思っ

たら、もっと広い意味合いだったんですね。  
**田中** そうです。当時リハビリテーションというのはそれほど

メディカルコート八戸西病院の回復期リハビリテーション病棟の様子。早期かつ集中的なリハビリはより高い効果が見込まれるため、365日提供体制をとる。退院後は、外来リハビリや訪問リハビリにより在宅生活や社会復帰をサポート。



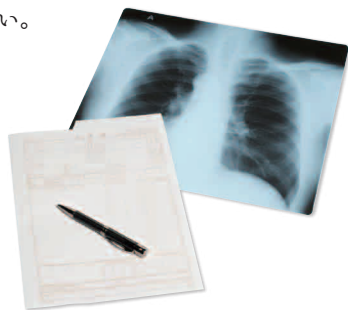
メジャーではなくて、理学療法士も実際そんなにいなかった。その評判が口コミで広まって、お年寄りの方もどんどん増えてきたんです。で、困ったのは家に帰れないお年寄りが出てきたんです。帰っても、自分の居場所がないとかね。そこで老人下宿というのを始めたんです。部屋にベッドが置いてあって、食堂があって、そこでおしゃべりしながら一日過ごす。利益は上がりませんが、大変喜ばれましたね。

**紺野** 老人ホームみたいなものですね。

**田中** 当時お年寄りの社会的な

## 今、医師としてのあなたを 日本でいちばん求めているのは、 東北です。

たとえ病棟があっても、立派な医療設備があっても、  
清潔なベッドがあっても、  
お医者さんがいなければ、そこは病院とは言えない。  
いま、東北が直面しているのは、その現実です。  
そして、東北の医師が不足しているという現実、  
東北以外のお医者さんにしか救えない。そう思うのです。  
この誌面を借りて、医師であるあなたにお願いがあります。  
移り住んで来てほしいとは申しません。  
週に2、3日、一年にすれば100日程度でもいい。  
あなたの時間を分けていただけないでしょうか。  
東北の力になっていただけないでしょうか。  
人の幸せは、健康があってこそ生れるもの。  
そのことを誰よりも知るあなたの力を、  
今、誰よりも求めている人々が東北にいます。



東北医療福祉事業協同組合 **どこよりも、いのちを愛する東北へ。**

東北エリアにおいて医療・介護などの豊富な経験をもとに経営環境向上のための運営支援、  
また、人材確保や教育までトータルにサポートします。

■上記広告に関するお問い合わせは

**E-mail: doctor@sg-kumiai.or.jp Tel: 0800-800-5533 (通話料無料)**

受付時間 平日9時～17時(土日祝日は除く)

東北医療福祉事業協同組合 仙台事務所  
〒980-0022 宮城県仙台市青葉区五橋 1-1-17 仙台ビルディング駅前館6階

URL <http://www.sg-kumiai.or.jp/>

検索キーワード **いのちを愛する東北**



### 田中 信幸

Nobuyuki Tanaka

昭和20年北海道生まれ。昭和44年岩手大学農学部農学科卒業。製薬会社で営業職を経験後、リハビリ専門の病院を立ち上げる。その後、介護事業の充実を図り、医療・介護・福祉・予防・教育の分野で地域に密着したサービス提供に努める。東北医療福祉事業協同組合理事長。SGグループ代表。

院というのが問題になりましたからね。国もそれを解消するために老人保健施設等を制度化するという事になって、うちが青森県第一号で手を挙げたんです。

**紺野** それから施設の数がどんどん増えていった？

**田中** 病院がないまわりの市町村から、補助金だけでなく土地も提供するから来てもらいましたという申し出もありました。その後、老健だけでなく、デイサービスをはじめたり、グループホームをつくりたりして施設が増えていったので、医療や介護の事業協同組合をつくらなです。そして、食材の共同生産や物品の共同購入、職員研修など

支援の範囲を徐々に広がっていきましました。

**紺野** それが今回の震災で役立ったわけですね。

**田中** そうです。そして震災を機に、「どこよりも、いのちを愛する東北へ。」をスローガンにグループは再出発しました。

**紺野** みんな東北に目を向けてほしいと。

**田中** みんなが東北に傾注してくれないければ、復興はないと思つたんです。地域医療の再生もそうです。震災でお医者さんも大勢亡くなっています。心労がたつた診察現場に出られない先生もいます。三十年前、最初に病院を立ち上げたとき、韓国や台湾から、戦前に日本の大学

で医学を学んで、日本の医師免許を持つている先生を招聘したんです。当時からお医者さんの数は足りませんでしたからね。それを思い出して、今度は日本全国からリタイアされたお医者さんたちを東北に招聘できないかなと考えたんです。

**紺野** 病院は息子さんにゆずつて、ご本人は悠々自適という方もいますよね。

**田中** 年間百日でもいいんです。ぜひ東北に来てお手伝いをしていただきたい。

**紺野** このシリーズ企画がきっかけになって、手を上げてくださったお医者さんもおいでになったと聞きました。

**田中** そうなんです。アメリカ

も、ぜひ頑張ってください。

**紺野** 多少なりともお役に立つことができて光栄です。今後とも、ぜひ頑張ってください。

### 紺野美沙子

Misako Konno

昭和55年、NHK連続テレビ小説『虹を織る』でヒロインを演じる。その後、女優として活躍するかたわら、国連開発計画親善大使に任命され、国際協力の分野でも活躍している。平成22年から「紺野美沙子の朗読座」を主宰。



在住の日本人のお医者さんです。メールを読んだときは胸が熱くなりました。この方は八月から三カ月間、公立志津川病院に、もうお一人の埼玉の方は、四月から週一回、二本松市の津島診療所に来て下さっています。

**紺野** そういうお医者さまが一人でも二人でも増えることで、東北も「今ひとたび、また」です。

**田中** 紺野さんをはじめ、今回のシリーズ企画「東北の医療はいま。」にご理解、ご協力いただいた関係者の方々に深く感謝いたします。